

を通じて輝くべき者であつて、此ヘーレン氏やラングトウレ

嬢を始め歐米人士の賛歎するの當然の事であると思ふ。

## 「いろは文庫」の英譯

齋藤修一郎

今より三十餘年前、即ち明治十二年、僕が亞米利加に遊學して居る時分に、爲永春水の「いろは文庫」を英譯して「忠義浪人」と名け紐育で出版した。それは「エドワード・グレー」と云ふ英人で亞米利加に居る小説家と連名して出版したのだが此の「グレー」と云ふ人は、ロードエルデンが公使として來て居る時分に、一寸日本にも來た男で、何か日本の事を書いたとがある、僕はそれを見て注意を喚び起し、つい相談して連名でやる事にした。約三百頁の小冊子であつたが、二十枚も繪を入れて一寸人の嗜好に投するやうに拵へた。先づ大概の新聞が「日本人の所謂忠と云ふ事を西洋に紹介せるは此の本が初めてならん、四十餘人の連中が種々雑多なる辛苦艱難を嘗めて、怨みを飲んで死せし故主に報ひしと云ふ筋立だが、我々泰西の人間に取つても有益なる教訓と思ふ、彩畫の如きは日本固有の美術を掲げしものにて、一寸解し難き點なきに非ざるも、能く玩味すれば趣味津津たるものあり、著者齋藤君とドクトル・グレーに感謝す」と云つたやうな批評であつた。なにしろ明治十二年の事で、僕は其の翌十三年に歸朝して、十五年から外務省に出る事になつたから、其の後の批評等も知らなかつたが、先達津田梅子女史がルーズベルトに會つた

時、貴女は「忠義浪人」と云ふ本を知つて居らるゝか、余は此の本に依つて日本を知り、日清、日露の大勝の起因も知つて居ると談せられたと云ふ事を或る新聞で見た事がある。さうして見れば其後も多少の人に讀まれて居た事が分る。併し此の僕の譯した「忠義浪人」を以て、赤穂事件を西洋人に紹介した最初の物と云ふ事は出來ない。慥か明治の九年か十年に、デッケンスが横濱で例の十二段の芝居を翻譯した事があるが、是は餘り武士道を發揚して居なかつたやうに覺えて居る、僕の譯した爲永の分は、切れぐになつて居るから、作意して之を補ひ、復讐後七年目に大石主税の弟等が、流罪放免になつて歸つて來た時、泉岳寺の坊主が慰めて、御身等は今ま何の財産もなからうが、人の持たない遺産を持つてると話した事があつたが、果して明治維新になつて天皇陛下より勅語を賜つたと云ふやうな事で結末を附けて置いた。

僕は此の本に依つて先づ赤穂義士を一寸西洋に紹介した譯だが、大石以下四十七人の人間を忠臣義士と今更ら事新しく云ふに及ばず、元祿十四年の事變以來、田夫野人老少婦女に至る迄、彼等の志を憐み、彼等の故主に向つて終始一貫せし精神を知つて居るから、別に鼓吹するの要もないやうである

が、僕の最も大石に感服する點は大石の用意周到なる所にあり。凡て天下に事を爲さんとするか、又は或る一目的を達せんとするには人の思ひ及ぶ所迄氣を附けて、一點の遺漏なきに非れば事を誤るものである。此の點に就ては、我が國家あつて以來の大偉人として徳川家康と大石良雄を推す。徳川と大石共に其の劃策の周到緻密であつて、少しの遺漏ない事は實に大偉人たる資格を具へて居ると思ふ。大石が世人より赤穂の浪人が飢餓に迫つてあゝ云ふ事をしたと云はれる批難を避くる爲めに、四十七人各々に用意金を携帶せしめ、又た

銘々藥迄用意させたと云ふ手配の周到な事に至つては、實に唯だ感服と云ふ外に一言もないのである。目的は少し違ふが彼の石田三成が六條河原に梟首になる前晚、腹工合が悪いから葷粥を喰はせろと云つて、獄卒が笑つたのを一喝したのとは同じであつて、苟くも英雄豪傑の士は萬事に附けて用意周到でなければならぬ。何事に拘らず大事を爲す人は必ず用意周到である事は、東西古今一轍である。僕は、大石の用意周到實に一點の遺漏なきを見て、我國一二の大偉人と推稱して憚らぬ次第である。

## 大石良雄と佛敎

文學博士 前田 慧 雲

時代には時代の精神がある、而して其の精神には背景がある、背景が變れば、自然其の精神も變つて來るのは、是れは極めて自明の理である、封建の時代には武士と云ふ者があつて、封祿を賣つて専ら士道のみを磨いて居た、然し今日は然る階級は無い、四民平等、何人も生活の壓迫に迫られ皆な額に汗して働くと共に、又た其れ々々の人たる道を守らねばならぬ。但だ武士の制度の無い今日に、形式にも精神にも昔の武士の心掛や、武士の平素に倣はねばならぬと云ふのは極めて無理な理窟である、なる程昔の守るべき處は武士道であつたらう、併し今日の守るべきは平民道である、變時の道徳のみを教へる武士道は、平時道徳を必要とする今日に當つて、決

して其の全部を履行さるべきものではない。況んや其の形式のみを學んで、彼の仇討のやうなものまでも、今日に行はうとしたらばどうであらうか、此は餘程考へねばならぬ、進んで其精神すらも亦た然りである、已に廢物に歸して用ゐられぬ部分も大分ある、斯うした處は、ごしく刮愛して、其の必要な部分のみを利用すべきであらう。

たとへば現代の國民特に青年子女は、氣風が餘りに懦弱に走つて居て、少しも確乎たる信念や態度が無い、餘りに自己を營むのみに急で、國家と云ふ大きな物の存在を忘れて居る様な傾向がある、是は好ましからぬ風潮である。是に對する對照として、武士道から獲る可きものは堅忍な意志であらう、又